

部活動の民族誌
——タテ社会論を中心に——

文化人類学専攻 シンジルトゼミ
219-L1060 美坐有希

1.序論

本論文は、学生の多くが入り、長い時間を費やす部活動に着目し、部活動が学生にとってどのような場であるのかを、部活動のタテ関係の実態から明らかにすることを目指すものである。部活動がどういった構造で成り立っているのか、中根千枝の「タテ社会」の理論をもとに考察する。本論文を通して次の3つの問い合わせを解明したい。【問1】なぜ学生は部活動に入るのか、【問2】部活動の人間関係は、なぜ上下関係が厳しくなりやすいのか、【問3】中学校から大学にかけて、部活動の人間関係は変化するのか。部活動は今でも多くの学生が行っているもので、今後も色々な意義や課題が生まれると考えられる。また、部活動は自主的なものとされながらも、一度入ってしまうと強い人間関係が生じ、実態としては異なるのではないかと思われる。この実態について、タテ社会の理論と共に、部活動に所属していた経験のある大学生の語りから考察する。

2.タテ社会は有効か

インド留学などを通して実証的な方法論を確立した社会人類学者の中根千枝は、『タテ社会の人間関係』〔1967〕のなかで、日本社会の構造的なあり方をとらえるため、「タテ社会」を提唱している。社会集団の構成の要因を抽象的にとらえると、社会的個人の一定の属性を示す「資格」と、一定の枠によって一定の個人が集団を構成している「場」という二つの原理が設定でき、日本では場に集団意識が強くおかれているという。日本のあらゆる社会集団に共通した構造を、中根はタテの組織と呼んでいる。タテはいわゆる親子関係で、同列ではないものを結ぶ。ここでは同一資格を有する者であっても、序位による差が意識され、年齢や集団に入った年次などにより先輩・後輩が生まれる。

このような中根のタテ社会については批判もある。知識社会学を専門とする矢澤修次朗〔2018〕は、グローバル化や情報化、単独者化によって社会変動が起こり、日本型システムの根本的再編成が求められると主張している。しかし、中根はその後の著書で、現代社会においても上級生、下級生の区別があることを、社会の構造が変化していない一例として挙げている。そこから現代のタテ社会があることを前提として、以降の章では部活動の人間関係について、タテ社会がどのような人間関係をつくっているのか述べていく。

3.部活動にまつわる研究

部活動研究においても、上下関係を軸とする縦社会の存在は意識されてきた。部活動についてはさまざまな先行研究がなされているが、本論文では主に部活動内の人間関係が現れる部分に着目する。教育社会学的立場から部活動を研究する藤田武志〔2001〕によると、「居場所としての部活動」のなかでは、学業とは異なる場が生徒の学校適応につながるという機能があげられるという。「体罰」「勝利至上主義」といった問題や現象については、それぞれの言葉を用いて説明が行われてきた。スポーツ社会学を専門とする西

山哲郎 [2014] は、競技スポーツでの業績達成より組織の維持を優先する<集団主義>という言葉を、教育社会学者の内田良 [2017] は、部活動をやめさせない圧力として「絆」という言葉を用いて、「絆」が人と人とのつながりを強化し、逃げられない拘束を生むと説明した。文化心理学的側面から部活動を研究する尾見康博 [2019] は、勝利至上主義の元では技術的にすぐれたプレーヤーが優遇されがちだが、「気持ち」なら指導できるというものがあり、これによって年齢を問わず技術レベル優先の序列にはならないことを示している。これらは用語は異なるものの、日本特有ともいえる部活動にまつわる現象について、日本の特色を見いだそうとしている点で一致している。

4.部活動の現状、タテ社会は本当か

しかし、このような日本の特色を部活動という現象から見いだそうとするものは、「理論的一貫性を欠く」 [中根 1967:18] 危険性がある。そこで改めて中根のタテ社会という概念を使っていく。調査は、筆者の周りの大学生5名に、中学校、高等学校、大学での部活動（またはサークル、学生団体活動）の経験についてインタビューを行った。中学校で剣道部に所属していたA氏は、中学校時代の剣道部で勝利至上主義や、同級生内での上下関係があったと述べ、それが快いものではなかったと話してくれた。休みにくさにに関して圧を感じることもあったという。これは、タテ社会では人間関係の強弱が実際の接触の長さに比例しやすく、個人に全面的参加を要求するためだと考えられる。

友人関係について、大学よりも高等学校の方が関係が強くなりやすい、ということを何度か聞かれた。大学で探検部、ゴルフ部に所属した経験のあるD氏は、大学でも友達はできたが、高校の友達の方が仲が良いという。これは過ごした時間の長さが短いからではないかと推測できる。そのため中根のいう小集団が機能しにくく、大学生は様々なコミュニティに参加しようとしている複数の「場」を探しているといえるだろう。

5.結論

これまでの分析を通して、以下のことを明らかにした。 [問1] 中学生にとって部活動に入るということは当然とされやすく、高等学校・大学に関しては友人作りや学校への適応の意図という側面が大きいことが明らかになった。 [問2] タテ社会は入団時期によって関係が固定されることや、接触時間の長さが人間関係の強さに結びつくという特徴を持つ。この特徴が影響し、「礼儀」や結束力に繋がってくる。またタテの関係が親分側も拘束することで、先輩側の行動にも強制力が働くことがある。さらに、部活動のタテ社会というのは先輩後輩関係だけが特徴なのではなく、同級生においても、集団競技や技術の比較ができる場合、仲間意識やライバル意識が生まれることが分かった。 [問3] 人や部活動によるとは考えられるが、今回の調査では中学校、高等学校、大学と段階が上がるごとに、上下関係が緩やかになっていた。また大学では、それ以前と異なり、クラスや部活動などで同じ人と毎日接することが少ないため、新たな「場」を見つけようとしていることが、人間関係の変化の要因となっているということを明らかにした。程度の違いや学年による変化はあるものの、部活動においてタテ社会は常に存在していることが分かった。日本において部活動は多くの人が入るものであり、部活動は、社会人になっても会社等での人間関係として存在している日本のタテ社会を、より強固なものにしうると考えられる。